
カトレア嬢の計画

泉夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カトレア嬢の計画

【Nコード】

N2289Z

【作者名】

泉夏

【あらすじ】

侯爵令嬢のカトレアは、王妃候補として宮廷主催の夜会に出席することになる。平穏な暮らしを望むカトレアは目立たぬようやり過ぎす。だが、未だ妃を娶らぬ王の理由を知ってしまい、協力するはめになる。

ここはペペイ王国。

先代が病で急死したため、クリザンテーム王太子が23歳という若さで王となった。

周りによく支えられ、治世は落ち着いたものである。
だが、王の隣は未だ空席で、側室すら一人もない。
国民の専らの噂は、どの令嬢がその場に座るかだ。

「私が妃候補に？」

プリュダント侯爵令嬢カトレアは驚いた。

侯爵には息子がいないばかりか、娘もカトレア1人だった。
そのため、彼女がしかるべきところから婿を迎え、家を継ぐもの
ばかり思っていたが・・・。

なにより父がそういったことを今まで一言も言わなかった。

「一応な。」

「一応？」

きょんとした娘に、父親は安心させるように笑いかけた。

「名が挙がっているのはもちろんお前だけではないよ。私は遠慮したのだが、侯爵という位を頂いてる手前そうもいかないらしい。」
「あら。娘を王の側にやろうというのなら、敵は少ない方がいいん

じゃなくて？自ら辞退しているというのに……。」

「もちろんそういう方もいたよ。だが、王の側近方は簡単に引いてはくれなくてね。」

「……お父様の娘ですものね。」

カトレアは思わずため息を吐いた。

娘が言うのもなんだが、父であるプリュダント侯爵はとても有能である。

ゆえに彼も王の側近の一人であり、仲間内では、ぜひとも彼の娘に後宮を掌握してもらいたいと思っっているらしい。

王の周りがしつかり固められているため、隙を狙うとしたら女だと思っっている者が多い。

今のところ、後宮には誰も迎えてられていないが、先を見通してのことである。

もし、欲深い者の娘や親類が後宮にやってきても、カトレアならば、上手くどうにかしてくれるだろうと。

幸い正妃になってもおかしくない家だ。

「皆さん、私を買被りすぎだわ。」

そうつぶやくと、侯爵はカトレアの頬をゆっくり撫でながら言った。

「そんなことはない。カトレア、お前は素晴らしい、私の自慢の娘だよ。……その才覚をそのままにしておくのは正直惜しいと思っっている。だが、無理強いは決してしない。お前が思うようになさい。」

「はい、お父様。」

もちろん父の役に立ちたいと思っている。

女の身であるから、仕事の手伝いが出来ないことを悔しく思ったりもした。
だから、亡くなった母の変わりに“女主人”として、家を守ってきたのだ。

だが、女の身であるからこそなれる“王妃”。

はつきり言って、面倒なので嫌だ。

父の所為にするのは違っだろうが、今までそんなことほめかしたこともない。

お前は婿を迎えて、この家を守るのだよ。なんて言ってたのに・・・。

「面倒な事になったわ。」

「何がですか、お嬢様？」

イポメがカトレアお気に入り紅茶を入れながら尋ねる。
侍女であるイポメは、カトレアが小さい頃から仕えてる、少し年の離れたお姉さんのような存在だ。
だから、彼女には大概なんでも話した。

「私の名が妃候補に挙がっているらしいの。」

「まあ。それはそれは・・・。」

イポメはちらりとカトレアの顔を見て苦笑した。
世間では名誉あることと誇ってよいのに、我が主はしかめっ面である。

相当嫌そうだ。

「でも一応ってことらしいわ。」

「なんですか、一応というのは？」

「お父様はお断りなさったらしいのだけど、側近の方々がそれを許さなかったのですって。」

「ふふ、随分期待されていますね。」

それを聞いて、紅茶を飲んで少しは表情が和らいでいたはずの顔が、また逆戻りになる。

「期待されても困るわ。」

ぐつと紅茶を飲み干し、ため息を吐く。

ふとあることを思い出し、さらに大きくため息を吐く。

ああ、幸せが逃げていく……。

「早速宮廷主催の夜会が開催されるそうよ。……そういう主旨の夜会に参加しなければならいなんて。想像するだけでおぞましいわ。」

「きつと魔の巣窟ですね。」

「……魔の巣窟……。」

さらにぞつとするカトレアに、うんうんと頷くイボメ。

ただでさえ人の多い所は苦手なのに、様々な思惑が絡む夜会。

きつと色取り取りな小鳥たちがひしめき合うのだろう。

そして親鳥も高らかに鳴くに違いない。

2（前書き）

お気に入り登録と評価、ありがとうございます。

「お嬢様、お綺麗です。」

イポメがそう言うのと、他の侍女たちも満足そうに各々声を掛けてくる。

カトレアは鏡に映った自分の姿を忌々しく見た。

普段薄化粧の顔には、しっかりと化粧が施されていた。

垂れ目気味の大きな目はラインによってより強調され、目元の黒子も際立っている。

少し厚めの唇には軽くグロスが塗られているだけだが、十分美味しそうに見える。

パンジー色の華美すぎない上品なドレスに、きらりと光る小粒のアクセサリーたち。

綺麗に結い上げられた黒髪はいつも以上に美しく光沢を放っている。白く細いうなじには少し後れ毛がかかり、なんとも艶かしい。

そこには慎ましやかな貴婦人がいた。

今夜はついに例の夜会だ。

そのための装いなのだが、どうも気が重い。

着飾る事は嫌いではなく、むしろ好きだ。

気持ちが華やかになるし、自分の成長を周囲に見せることができている。嬉しい。

嬉しいが・・・今夜は別だ。

なるべく目立たぬよう、化粧やドレス・アクセサリーは落ち着いたものだ。

きつと他の令嬢たちに比べると地味であろう。

その令嬢たちの姿を思い浮かべてげんなりする。

いつもなにかと目の敵にしてくるとある人物の高笑いが聞こえてくるようだ。

願わくば、絡まれませんように・・・。

そんなカトレアの願いはもちろん儚く散ることになるのだが。

ここにも一人、憂鬱な気分の者がいた。

今夜の主役、クリザンテムその人である。

朝からため息が止まらない。

今も吐いたところを侍従であるクロキウスに見咎められたばかりだ。

「いい加減観念なさって下さい。」

「そうは言っても気が進まない。」

「今まで誰も娶っていなかったことがおかしいですよ。」

「・・・・・・・・。」

確かにそうだ。

23にもなつて誰一人娶っていない。

王太子時代から頑なに拒んでいた。

父がいた頃は辛うじて許されていた我儘だったが、今となつてはもう無理なようだ。

わかっているがそれでも悪あがきしてしまう。

「跡継ぎならばプリムヴェールがいる。あれには側室がいるし、子ができればそれを私の養子にしてもいい。」

「プリムヴェール様は歴とした王の弟君であらせられますが、貴方様が王妃を娶り子を成せばすむことですよ。」

「・・・それはできない。」

「できますよ。王妃が一人もいないなど外聞も良くない。そろそろ

国のことも考えていただかないと困ります。」

「……………」

「クリザンチーム様？」

項垂れた王を見て情けなく思う。

これに関してだけはどうにも困ったものだ。

常日頃から側近たちがそれとなく話を出す、全く聞く耳を持たない。

故に今夜の夜会という強行手段に出たのだ。

まだ王にどのご令嬢が良いかと選択権があるだけかもしれません。頂きたい。

「まただんまりですか、仕方ないお方ですね。貴方様はこの国の王なのです。……早くお忘れください、レジオンの娘など。」

「などと言ふな。私にとっては大事な娘だ。」

「……それでは忘れなくとも結構です。」

「クロキウス……………」

大きく息を吐いたかと思うと、今までの厳しい声から一転優しい声色に、クリザンチームはぱっと顔を上げて縋るようにクロキウスを見る。

クロキウスは彼に優しく微笑むが、然うは問屋がおるさなかった。

「ぜひとも王の胸の奥に大事にしまつて、そのままずっとなし出さないで下さい。このままでは妨げになるばかりか、王妃になる方にも失礼ですからね。」

「クロキウス！」

「さ、今夜はどんなご令嬢方がいらっしゃるのか楽しみです。そうそう、プリユダント侯爵のお嬢さんもいらっしゃるとか。」

クロキユスを睨んでいたクリザンチームは、プリュダント侯爵という人物名に反応した。

「プリュダント侯爵の娘も来るのか？珍しいことだ。」

「はい。侯爵が余程大事にされているのか、公の場にはめったに姿を見せませんからね。私も実は大変楽しみにしているですよ、カトレア嬢にお会いするのを。」

「お前も？それも珍しいことだ。・・・まあ、侯爵の娘というのは興味がわかないでもないが。」

「そうでしょうとも。大変美しく聡明でいらつしゃると評判の方です。」

「ほう、さすがはあれの娘といったところか。」

それとなく王妃候補の筆頭であるカトレアを話題に出す。

なんだかんだで興味を覚えたようだ。

これなら夜会でも少しは動きがあるかもしれないと、内心複雑な思いを抱きつつ、ほくそ笑む侍従であった。

まだ夜会までには時間があるということで、一息休憩を入れることにした。

イポメがお茶を入れてくれたが香りがいつもと違う。
だがとてもいい香りだ。

胸中不思議に思っていると、イポメがクスリと笑って言う。

「お嬢様の心を和らげる効果のあるお茶です。香りもよろしいでしょう?」

「ええ、なんだかスツとするわ。・・・ん、美味しい!」

「それはようございました。実はウイエ様が持っていたのです。」

お茶を噴出しそうになり、なんとか堪える。

・・・驚いた。

「・・・ウイエが来ているの?」

「はい。旦那様とお話しされているようですが、終わり次第こちらに顔を出すとのことですよ。」

「そう・・・。」

ウイエ——ウイエ・ブワジナージュは伯爵家の三男坊で私の幼馴染だ。

小さい頃はめそめそと泣く弱虫で、私の後をよくついてまわっていた。

私には兄弟がいなかったから、そんな彼を嬉しく思いあらゆる敵（主にいじめっこだが）から守ったものだ。

その度に周りから揶揄されていたが、私はそれが当たり前だと思っ

ていた。

ウイエはカトレアがずっと守ってあげる。

きつとずっと……——そう思っていたのは私だけだったよ
うだけど。

と懐かしい事を思い出していたら、扉がノックされウイエが入って
くる。

タイミングのよいこと。

目が合った瞬間、彼に動揺が走ったように見えたが気のせいだった
ようだ。

少し癖のある金髪を揺らし、にっこり笑いながらこちらに近づいて
くる。

「カトレア、久しぶりだね。元気だったかい？」

「ええ、本当に。ウイエは？噂は予予聞いているけど。」

片膝を着き優しく手を取ると、軽く口づけるウイエにちくりと嫌味
を言う。

彼は苦笑しただけだった。

「厳しいな、カトレアは。僕はこの通り元気だよ。」

「そう。」

正面に座ったウイエの顔を見つめる。

私の可愛いウイエは都で評判の色男になってしまった。
輝く金髪に優しく光る青い瞳。

小さい頃は本当に天使かと思ったくらいに可愛い男の子は、今では
すっかり美しい青年へと成長していた。

数々の女性と浮名を流すどうしようもない人。

どうしようもないといった点では今も昔も変わらないのかもしれない。

いが。

ある日突然、ウイエは私と会いたくないと言い始めた。どうしてそうなったのかと私は何か嫌われるようなことをしたのかととても困惑した。

ブワジナージュ家の家人も困惑していたが、ウイエの兄2人はなにやらニヤニヤしていたのを覚えている。

それを見て、それほど重大なことではなく一時のものだろうと簡単に思っていたのだが・・・。

そう単純なものではなかったようで、会えぬ日が一日、一週間、一か月、半年、一年と続き――

気が付けばもう何年も会っていないという状況になっていた。

そして彼の周りには常に何人もの女の子がいて、話しかけることが出来なかった。

自信に満ちていきいきし、冗談なんかを言って周りを楽しませていた。

私の弱虫天使はもうどこにもいなかった。

とても寂しかった。

それからというもの、お互い見かけても会話することはなくやり過ぎす日々が続いていた。

――今日までは。

だから嬉しかった。

しかも彼の方から私に会いに来てくれたのだ。どんな話をしてくれるのかわくわくする。

「これ、どうもありがとう。」

「ん？」

「このお茶よ。とても香りがいいし美味しいわ。」

「君にそう言ってもらえてよかったよ。こんなもので申し訳ないけ

れど。」

「そんなことないわ、十分よ。・・・それで？」

「それでって？」

「どういう要件でいらしたの？今までずっと避けていた貴方がこちらに出向くなんて。」

「ん・・・、ちょっと、ね。」

なんだというのだ。

はつきりしないウイエに少しイラっとする。

どうも今日は日が悪い。

違う日ならばもう少し大らかに構えられたかもしれない。

軽く息を吐くと、それに反応したのかウイエが声を上げる。

「カトレア。」

「？」

なんだと目線で先を促す。

彼の喉が大きく動くのを見た。

「王妃候補に拳がっていると聞いた。」

「・・・そうらしいわね。」

またそのお話しかとうんざりした。

初めてその話を聞いた日からその話題はよく拳がっていた。

その度に私の眉間にも皺が刻まれていたのだ。

ただし部屋にこっそり帰ってからのことだが。

痕が残ったらどうしてくれるのだ。

「まさかそれを話すためにわざわざここへいらしたの？」

「ちゃんと確かめたかったんだ。」

「そう。それでお父様には確かめたのでしょうか？」

「ああ。本当だとおっしゃった……。」

「そう。」

「そうって……。他に言うことはないのかい、カトレア。」

何を言えというのだろうか、この人は。

私のわくわくした心は徐々に冷めていった。

がっかりだ。

「残念だわ、ウイエ。」

「……なにがだい？」

「私、実はウイエが訪ねてきてくれたこと嬉しかったのよ。」

「カトレア……。」

「ずっと話すことができなくて寂しかったわ。見かけてもお互い知らないふりをするが多かったし、私は以前と比べると外へ出かける事も減っていたから……。こうして昔の様に向かい合ってお茶を飲むなんて嬉しかったのよ？」

ウイエの頬に赤みがさす。

テーブルの上に置かれていた私の右手を握って言う。

「もちろん僕もだよ、カトレア。君とずっとこうやって話したかった。」

「話したいことはたくさんあったはずなのに、まさかこんなつまらない話をされるなんて思ってもみなかったわ。」

拒絶するようにするりと彼から手を引き抜く。

案外あっさり解けた。

「そんなつもりは……。」

「帰ってちょうだい、ウイエ。話すことなどないわ。」
「カトレア……。」

今度は青ざめたウイエが言う。
ふん、知るもんですか。

「お嬢様、そろそろお時間です。」
「そう。」

状況察したイポメが声をかけてくれる。
さすが頼りになる侍女だ。

「貴方も今夜の夜会に出席なさるなら、早く戻った方がいいのでは
なくて？……失礼しますわ。」

何処か呆然とするウイエを置いて私は部屋を出た。
今度こそはつきりと眉間に皺が寄っている。

そんな私を見てイポメはやはり苦笑するのだ。

「しかしよろしいのですか？あのままで。」
「知らないわ、あんな馬鹿。放置よ放置！」

ずんずん進む私を見てイポメがつぶやいたが、私には聞こえなかつた。

「ウイエ様ったら本当に困ったお方……どうしてお嬢様を盗られるのが心配でたまらないとその一言が言えないのかしら。真に好んでいる方には不器用すぎるわ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2289z/>

カトレア嬢の計画

2011年12月24日08時55分発行